

わくわく人生 75 歳からの語学留学 ——新たな挑戦、ウクライナ語

最近配信されたメルマガ（外語会 126 号）によると、2017 年 9 月 14 日、東京外国語大学はウクライナで最も歴史のあるイヴァン・フランコ記念リヴィウ大学（以下リヴィウ大学と称す）に **Global Japan Office (GLO)** を設置し、その開所式が行われたという。本開所式は日本とウクライナの国交樹立 25 周年記念事業の一環として、日本国大使館の認定のもとに実施された。仄聞するに、ここまでに漕ぎ着けるには、東京外国語大学名誉教授中澤英彦氏とリヴィウ大学の日本語講座主任のオレスタ・ザブランナ准教授両氏の地道なご努力が礎となったという。

私はこの夏 3 週間にわたってリヴィウ大学の夏季語学・歴史・文化講座（初めて開講したのは 1996 年）に参加した。私を除けば、参加者の殆どが学生で、若干社会人も休暇をとって参加した者もいる。シニアにとっては短期留学とはいえ、海外での留学生活は何かと不便さを伴い、実のところ体力が続くだろうかという一抹の不安も脳裏をよぎったが、妻とウクライナのリヴィウに住む、現在リヴィウ大学の博士課程在籍中の **Oleh Voitkiv** 君が、逡巡している小生の背中をポンと押してくれたおかげである。今回の **Summer school** でも彼は **Coordinator** の有力なメンバーの一人として、**School director** の **Lesya Antoniv** さんを陰に陽に支えてきた。彼のきめ細やかな配慮がなければ、果たして 3 週間無事に過ごせたかどうかわからない。

個人的なことになるが、**Oleh** 君とは 2011 年ポーランドのシロンスク大学の夏季語学・文化・歴史講座で知り合い、それ以来ポーランド語でメールのやりとりをしてきた。彼は昨年 3 月中旬に来日し、8 日ほど拙宅にホームステイして行った。ウクライナ人が訪日するにはヴィザが必要とのことで、彼の身元保証人になり、こちらから私の居住・収入証明書などを送付しなければならなかった。日本人がウクライナに観光旅行や短期の語学研修などには特別なヴィザは不要で、どういう訳か国家間の外交関係が互惠でないことをその時初めて知った。

それはそうと、リヴィウ大学の夏季講座は 7 月 17 日から 8 月 5 日までの 3 週間の日程で開催された。私の宿泊先は大学が用意してくれたホテルであったが、南向きで決して快適とはいえなかった。簡素なベッドと机、お茶を沸かすケトルと小型冷蔵庫、それにトイレ、シャワーがあるだけだった。朝からカンカン照りの様相で、日中 30 度を優に越したこともたびたびあった。ウクライナも地球温暖化の影響をもろに受けているようだ。もちろん、部屋にはクーラーなど

望むべくもない。健康維持のために、いつも授業には早めに出かけて、大学本部と対峙している Ivan Franko 像（高さは 30 メートルもあろうか）の前で、IC レコーダーに録音しておいた NHK のラジオ体操を土曜、日曜日以外毎朝励行した。通り過ぎて行くウクライナ人の物珍しそうな視線を浴びた。

18日に大学本部の最も格式の高い Mirror Hall で Opening Ceremony が開かれる。受講生（19人）は殆どの人が正装の出で立ちで出席。国別に分けると、日本、韓国、米国、フランス、ドイツ、オーストリア、スペイン、チェコ、スロヴェニアからの参加者だった。私は Oleh 君から昨年お土産にもらったウクライナ式の正装で出席する。まず大学関係者の挨拶がウクライナ語であり、それを通訳の Iryna Pylypchuk 氏が英語に直す。その後、リヴィウ大学の留学生でもあるコンゴ出身のバリトン歌手 Blaise Malaba さんの歌が、ホール内に朗々と響き渡り、ウクライナの民族楽器によるバンドウラ奏者 Iryna Kmet さんの荘厳な響きのする伴奏に合わせて披露された。

Opening Ceremony が終了すると、Coffee break に入り、そのあと簡単な Placement test があった。学生時代にはロシア語を専攻したので、ウクライナ語の一部の字母の発音を除けば、キリル文字には何ら抵抗はなかったが、ウクライナ語については文法も大切だが、発音やアクセントが重要な要素と考え、初歩の初歩から始めた方が進歩も早いと思ったが、どっこい問屋が卸さない。どのような外国語を始めるにしても、音声学の知識は欠かせない。発音では中級コースでこってり油を絞られることになる。

午後からは大学本部前に集合して市内見学に出かける。市内の雰囲気は以前夏季講座で学んだ、ヤギウェオ大学のある、ポーランドのクラクフにもよく似ている。それもそのはずで、かつて Lviv はポーランド領だったことがある。

翌日（19日）からクラス分けに応じて、9時半から11時までウクライナ語のレッスンが始まる。11時から11時30分まで Coffee break。11時半から13時までウクライナ語の授業があり、それから14時まで昼食の時間で、参加者はそれぞれ大学の近くのレストランで昼食をとることになる。朝食や夕食は自分で準備することになる。

私たちのクラスについて少し触れておきたい。先生は若い女性の Olha Tseniukh 氏であった。クラスには韓国の Hankuk University of Foreign Studies（韓国外国語大学）のウクライナ語科の活きのいい学生さん3人（男性）、ウクライナ系の米国籍の婦人とそれに最年長の私であった。授業中一番困ったことは、Olha 先生と向かい合わせに坐ったため視線が合い、よく質問が投げかけられたことであった。その際、無意識にロシア語やポーランド語が口について出てしまったことである。その度に、Olha 先生は目を白黒させ、微笑を浮かべながらも忍耐強く正しい答えがかえってくるのを待っていてくれた。ウ

クライナ語もポーランド語もロシア語もスラヴ語系の言語で、似て非なる言語であるから、どうしても以前に習った言語が **interference** するのだ。複雑な国際情勢もあって、ウクライナではロシア語は余り歓迎されないことが肌で感じ取れた。

午後の部では 14 時から 16 時まで特別講師による講演がある。19 日には **Ivan Franko and Ukrainian Literature** という演題で **Sviatoslav Pylypchuk** 教授の講演があり、もちろんウクライナ語なので英語の通訳がついた。21 日には大学の図書館にも案内してもらった。その際、特別に稀覯本も見せてくれた。

その他、特筆すべきことは、7 月の週末に一泊旅行で **Kamyanets-Podiskyi** と **Khotyn** 地方に出かけたことだ。その頃までには参加者もお互い打ち解けてバスの社内も楽しい雰囲気でも盛り上がった。帰路立ち寄った **Kristall cave** の暗い洞窟内の見学で、下が粘土質のため私はよろけて足をすくわれそうになったが、韓国の若い女子学生が、とっさに手を差し伸べてくれ、ひっくり返らず腰を打たずに済んだ。さり気ない彼女の優しい行動は今でも忘れられない。

最後の週に **Summer school** の総仕上げに、参加者は全員発表をしなければならない。なかでも圧巻だったのは、韓国の学生チームが制作した、IT 技術を駆使した **Lviv** の紹介であった。さすが IT の進んだ国だと思った。私はウクライナの国民的大詩人 **Shevchenko** の詩の一節を藤原道山の尺八をバックに、みんなの前で朗読した。発音については授業後、**Olha** 先生に時間を割いてもらい、徹底的に指導していただいた。地方にバス旅行に出た際にも、隣の席に坐らせてもらい、日本人には難しい、ウクライナ語独特の発音を教示していただいた。努力の甲斐あって好評であった。これも **Olha** 先生のおかげである。

最後に、リヴィウ大学の夏季講座について、いくつか私なりの希望を述べ、提案をさせていただきたい。午前中のウクライナ語の授業は集中的に行われたが、若い意欲的な受講生向けの 4 週間、5 週間のコースがあってもよかったのかもしれない。それから、午後の事情講義ではもっと映像と音声(例えば映画など)を活用して欲しかった。それと学内に **Information Center** を定期的にでも設けていただき、現地情報や語学学習(例えば、辞書や教材類など)の相談にもものっていただきたかった。

わが母校の若い学生さんには内向きにならずに、韓国の学生さんのように、目標をもってどんどん海外に出かけて行って見聞を広げて欲しい。その際どうしても欠かせないのが語学である。

今回のウクライナ語夏季講習では大勢の人に支えられ、助けられ、若い学生さんらと一緒に机を並べて「元気をもらい」、有意義な留学生活を送ることができた。これからもロシア語科卒の先達のように、何歳であっても新しいことに挑戦したいと思っている。

なお本稿を執筆するにあたり、リヴィウ大学の School director の Lesya Antoniv 氏には大変お世話になった。

リヴィウ大学の夏季講座に関心のある方はつぎの website にアクセスしていただきたい。<http://summer-school.com.ua/school/program/?/ang=en/>

(小沼 利英 オヌマ トシヒデ;1968 年ロシア語科卒)